

2015年6月

公益財団法人 船井情報科学振興財団
2015年度 Funai Overseas Scholarship 第1回報告書

釣巻 瑤一郎

2015年度 FOS 奨学生の釣巻瑤一郎と申します。今秋よりマサチューセッツ工科大学機械工学専攻に進学予定です。第一回報告書では、留学を知ってから合格するまでの過程をご報告させていただきます。

1. アメリカへ留学を決めた動機と決心

私が初めて留学に興味を持ったきっかけは、東北大学に入学してまもなく行われた留学説明会でした。フランスにある INSA de Lyon の Marie-Pierre Favre さんの講演を聞いた時、初めて留学に興味を持ちました。しかし、その当時はアメリカではなくヨーロッパ、特にフランス留学への興味であったことを記憶しています。「海外の同級生と一緒に机を並べて勉強してみたい!」、これが留学に興味を持った理由でした。アメリカへの留学に初めて興味を持ったのは、マサチューセッツ工科大学 Media Lab の石井裕教授に密着したテレビ番組を見たことがきっかけです。皆さんの多くがこの番組をご存知かもしれません。私はこの動画を見た後、こんな刺激に溢れた環境があるのかと興奮したのを覚えています。しかしこの後、留学への準備を始めることはなく、学部三年生の研究室配属までは留学とは無縁な普通の大学生活を送っていました。

東北大学での指導教員である圓山教授の下で伝熱制御に関する卒業研究を始めた私は、学部卒業後にアメリカの大学院へ留学することを考えました。しかし、同時期にフランスへの留学も考えていた私は圓山教授と相談し、フランスの INSA de Lyon、そして東北大学での修士課程修了後にアメリカへ留学することを決心しました。留学時期をいつにするか悩んでいる方が多いかもしれません。私の場合はいくつかの理由から修士課程修了後にアメリカへ留学することを決意しました。第一に、学部時代に留学を希望していた理由が上記の通り、海外の教育を受けてみたいという目的意識に欠けた中途半端な理由によるものだったこと。したがって留学先がアメリカでなくてはならない強い理由がありませんでした。第二に、研究業績がなく、何より自分が本当に熱意を持って打ち込める研究分野がはたして伝熱工学かどうか、確信がありませんでした。し

たがって講義や演習、実験、インターンシップを通して修士号を取得できるフランスを選択しました。その後、アメリカの大学院へ Ph.D.取得のために留学することを決意した理由は、興味のある研究分野が見つかり、かつ深く学びたくなったこと、そしてその分野においてアメリカのいくつかの研究室が最先端の研究を行っていたことです。

2. 留学準備

フランスから帰国後、アメリカの大学院への留学準備を本格的に開始しました。まず、大半の大学の締め切り 2ヶ月前、つまり 10 月頃までは大きく分けて三つの準備を並行して進めていました。具体的には、研究成果を挙げることや、TOEFL、GRE に向けた勉強と受験、教授へのコンタクトです。研究成果を挙げることに時間を使いすぎたために、TOEFL、GRE の必要条件を満たすのに大変苦労しました。私が特に気を使ったのは教授へのコンタクトです。幸い、私が志望する教授と国際会議等でお会いする機会に恵まれました。また日本、フランス両方の指導教員を通して志望する他の教授とも知り合うことができ、アメリカにおいて Ph.D.取得の希望を伝えることができました。その後、10 月頃からは教授へのコンタクトを続ける一方で SoP や CV、自分の研究紹介ビデオ等の作成を進めました。11 月には船井情報科学振興財団の奨学生に幸運にも採択され、志望する大学の教授へ報告しました。そして 12 月に MIT, Columbia, Stanford, Georgia Tech, University of Utah の五校に出願しました。専攻は Stanford の EE を除いて、すべて機械工学専攻でした。

3. 合否と反省点

結果として MIT, Columbia, University of Utah の三校から合格を頂くことができました。すべての大学に共通していることは、教授へのコンタクトを事前にとっていたことです。ですので、私の場合はこれが重要であったようです。MIT の MechE に関しては事前に教授と連絡を取ることが合否に影響しないそうですが、事前に自分を知ってもらうことは大事だと思います。Columbia 大学に関しては、Skype 面接時に教授から合格を伝えられました。また教授のご尽力により、最終的には Presidential Fellowship 付きでの合格を頂くことができました。Georgia Tech は Skype 面接まで進むことができましたが、その時すでに MIT から合格を頂いていたので、面接を辞退しました。Utah からは通常の合格通知を頂き、対

して Stanford からは不合格を伝える e メールが届きました。

4. 反省点

留学準備を振り返り、反省点が大きく分けて二つありました。第一に、TOEFL、GRE の目標点をより早い時期に達成すべきだったこと。私の場合、個人的な理由から一回目の TOEFL 受験が 8 月後半と決して早くはありませんでした。また、GRE は準備が進まず、一回のみ受験しました。出願前年の冬から準備を始め、夏に目標点を達成することができれば、その後続く SoP 等の準備をより丁寧に行えたはずです。第二に、10 月頃からのスケジュールの立て方を正しく行わなかったこと。そのため、修士課程の研究活動が一番忙しくなる時期や留学準備終盤の SoP の推敲を行う時期、教授へのコンタクトを取る時期が重なり、自分の思うように準備を進めることができませんでした。結果として SoP の添削に協力頂いた方々には、締め切り直前に提出するなど、大変な迷惑をかけてしまいました。卒業研究や修士研究と並行して留学準備を進めている方は、無理のないスケジュールをしっかりと立て、実行していくことが求められます。今回の留学準備を通して学んだことをこれからの留學生活に活かしたいです。

5. 最後に

留学準備を支えて下さった先生方や研究室の方々、友人、家族に感謝しています。特に、長期留学を再度許してくれた寛容な家族にはとても感謝しています。また学部一年生の時から常にサポートを下さり、研究室に配属されてからは研究の楽しさをご自身の研究に対する態度を持って教えて下さった圓山教授に心より感謝しています。私のもう一人の指導教員である Dr. Rodolphe Vaillon は私の留学希望を支持してくださり、アメリカの教授を紹介してくださったり、私の拙い英文を校正してくださったりと多方面から多大な支援をしてくださいました。とても感謝しています。最後になりますが、船井情報科学振興財団に奨学生として採択して頂いたことは、選考において私をこの上なく有利な状況へと導いてくれました。選考委員の先生方には SoP の添削等、様々な支援をしてくださいました。財団事務局の方々の迅速な対応にはとても助けられました。感謝申し上げます。また交流会を通して得た奨学生とのつながりはこれからの留學生活をより豊かなものにし、そして今後の人生におけるとても大きな財産となると思います。頑張ってきます！！